

ている。前者については、一般的にはその漢訳は「無上菩提心を発する」と見られるが、これは正確ではない。原義は「菩提を發せる心を持つ」ことである。即ち本義は「菩提に對する欲求を懷く」ことである。経験的にはそういう意味でなければならぬのである。何か特別に「菩提心」という心があるように考えては靜態的になる。一種の回心でなければならぬ。「全く新なる精神的ビスタを開拓する精力の新たなる中心の発見」といい、「その後のその人の行為を決定する方向を与える」といつている。

後者の漢訳「發菩提心」は「菩提の思想を目覚ます」との意味に取りやすいが、それは誤りである。経験的には「菩提への欲求を懷く」ことであり、正しくは「無上菩提の成就に對する精神的渴仰を懷く」ことである。今此所にあげた漢訳の二例は、いずれも正しくは経験の所産からでなければならぬ。丁度それは大慧が警告した如く「看經の眼を具せずんば則ち經中深妙の義を窺い測る事能はず」との言葉を想起せしめるのである。それは又真宗の祖親鸞が『教行信証』卷三に『無量壽如來會』からの引文中、「至心廻向」について、正統の読み方に従えば「至心に廻向して」だが「至心に廻向したまえり。」と独自の読み方をされた。これによりて廻向行は弥陀から信者へと大転回する。この驚天動地の経験あつて始めて可能なのであつた如く、宗教は全て、かかる宗教的経験が土台になければならないといわねばならない。

謡曲における仏僧

——僧ワキの宗教的機能について——

今 泉 隆 裕

謡曲は曲目によって「幽霊能」（一般的には「夢幻能」・「現在能」の二つの区別がなされる。今回、取り上げるのは幽霊能のワキである。幽霊能は、死者の霊を中心として展開する告白劇（懺悔劇）である。そこに登場するワキは多くの場合、諸国一見の僧であり、この僧ワキは旅の途上で在所の幽霊（シテ）と対峙することになる。

これまでの能楽研究においては、幽霊能におけるワキは「観客の代表」とする考え方が支配的であり、ワキは文字通り脇に控え端座しているばかりで、シテの演技をただ見守る存在とみられ、あまり注目されてこなかった（野上豊一郎「シテ一人主義」）。

しかし、僧ワキは霊的存在との交流者という意味で、シャーマンの職能者と捉えることが可能であろう。舞台上に幽霊を登場させる、世界的にも稀有な芸能として知られる能楽であるが、その舞台上で幽霊を目のあたりにする劇を仕組む上で僧ワキの存在は欠くことのできない役割を担っていると考える。本来なら注目されるべき特性といえよう。

そこで本発表では、幽霊能における僧ワキを、シャーマン的人格をもった呪術—宗教的職能者として把握し、これまでのシヤーマニズム研究における分類で、どの類型に該当するか。ま

た、その類型に該当することは何を意味するか。そして、幽霊能一曲中の大半を占める告白は何を意味し、それを促す僧ワキの機能は、どのように把握されるべきで、そこから、どのような意図を読み取れるのかを考察した。

僧ワキがシャーマンの能力を有する呪術―宗教的職能者でなければ、そもそも幽霊を幻視することはできない。能舞台に幽霊が登場するための条件として、僧ワキは欠くことのできない存在であり、僧ワキの視点を介して観衆は幽霊（シテ）を幻視するといえる。

しかも、その幻視は社会的に要請されたもので、見えない鼓舞にもとづいて御霊の祓除を舞台上で繰り広げる。さらに、それは安定的になされる必要があるため、二元的構成のシャーマンとして僧ワキは造型され、さらにシャーマンの憑依に関する分類ではいえば、預言者型あるいは見者型でありながら、精霊を自在に操作する「精霊統御者」に相当することを確認した。

また、当然のことだが僧ワキは仏僧である以上、幽霊に対して仏教的な文脈から解釈を加える。幽霊は地獄（あるいは修羅道）といった仏教的世界観に対置され、自らのおこないを否定的に解釈し、懺悔（告白）し、僧ワキに引導される対象となる。そこで僧ワキは死者との直接交流をおして「懺悔を聴いてやる」存在であり、「引導を渡してやる」存在として死者に対して優位性を確保できるようにもなった。

僧ワキが登場する枠組みのなかで、死者は崇めることもなく、地獄での苦患を告白するにとどまり、仏法により引導される存在でしかない。もはや死者は畏怖の対象でなくなる。反対に、

僧ワキは罪を赦し、引導を渡す存在として、その権限を増大させる。しかも告白を現前化する劇を仕組み、それを繰り返して上演することで、仏教的な罪の意識は世の中に浸透し、何が罪なのかを観衆たちに意識させることになったのではないかと考えた。

これまで勧進興行の場で死者供養を劇に仕組むことが喜捨を促すために最も適した題材であったことは指摘されてきた。とはいえ、「告白劇」という文脈に置き換えたなら、そこから新たな幽霊能の一面が読み取れる気がしてならない。私だけだろうか。

宗教学的知見を加味した能楽研究のあり方も模索されてよいのではないだろうか。

在家仏教の顕れとしての説経節

千葉 俊一

中・近世芸能（文芸）である説経節に顕れた「仏教」とは、經典思想に源流をもちながらも、それとは異なる、それが変容し在家の生活に根付いたものである。発表者はそれを「在家仏教」と呼んだが、その呼称は適切ではなかったかもしれないと現時点では考えている。仏教の重層した変容の結果である日本仏教がさらなる変容を遂げ、生活者のいわば血肉と化したものが説経節を始め古典文芸に見出されるのである。

発表者は説経節を代表する五作品に頻出する語彙・表現を抽